

令和7年3月2日

<卒業式式辞>

積雪の多い厳しい冬となりましたが、ようやく温かな日差しが感じられるようになり、ふきのとうの芽吹きが待ち遠しい季節となりました。

そんな今日の佳き日に、長井市長 様、PTA会長 様、鷹桜（ようおう）同窓会会長 様、前校長 様はじめ、多数のご来賓の皆様のご臨席を賜り、山形県立長井高等学校令和6年度卒業証書授与式を盛大に挙行できますことに感謝申し上げ、教職員を代表して心から御礼申し上げます。

ただいま、呼名のありました159名の皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。そして、長井高校で過ごした三年間に対する思い入れのこもった元気な返事、ありがとうございます。皆さんは、中学1年生の終盤に突然学校が休校となり、約3ヶ月間ともに学校に通うこともできない辛い期間を過ごしました。その後も各種行事や部活動の自粛など、学校の活動は中途半端なものとなり、約3年間、制限の多い生活を送らざるを得ませんでした。高校2年の5月8日から新型コロナ感染症が第5類となり、ようやく通常に近い学校行事が開催されるようになりました。そして、2年次行事としての葉山登山、関西方面への修学旅行が実施され、大切な思い出を作ることができました。さらに部活動の大会や練習試合も可能となり、長井高校生本来の文武両道の実践を目指して努力され、2年次後半からは生徒会・部活動ともに活動の中心となり、学校全体を牽引してくださいました。その成果として、3年次のクラスマッチや長高祭では実行委員が中心となった企画を工夫して実施し、大きな盛り上がりを見せたのがつい先日のように思い起こされます。長高祭では約800名にのぼる多数の来場者の方々が楽しんでくださいました。皆さんが、全体企画やクラス企画、部活動の発表について自分たちの手で自主性を持って取り組んだあの姿、後輩の目にもしっかりと焼き付いていることでしょう。生徒会総会でも皆さんの自主性を大いに感じました。防寒着着用やスマートフォンの校内利用に関する議論の際には、数多くの意見が出され、こんなにも真剣に学校生活のことを考えているのかと改めて感心したところです。本当にお疲れさまでした。これからは、長井高校で培った能力を生かし、全国各地だけでなく、世界の舞台で自分の能力を大いに発揮してくださるものと思っています。皆さんの中には、地元で活躍しこの地域を支えてくださる方がいてくださればなおさら心強く感じます。

今日はここで、加藤セチという人物のお話をします。彼女は山形県庄内地区出身で、理化学研究所において女性として初めて主任研究員になった方です。

加藤セチは1893年（明治26年）に、現在の三川町で生まれました。その次の年に庄内地震で母、兄、姉を亡くしています。小学校卒業後、鶴岡高等女学校に入学するも、父の酪農経営が破綻、その後父は再婚して再起を図りましたが、セチが15歳の時に病気で亡くなっています。その後は継母（父の再婚相手、いわゆるママ母）に育てられています。家計を支えるために鶴岡高等女学校を中退し、山形女子師範学校に再入学して地元の小学校教師になります。その後、継母の勧めで1914年（大正3年）に東京女子師範学校に入学しています。その4年後に卒業し、札幌の高等女学校に勤めますが、自分の知識に物足りなさを感じ、北海道帝国大学に入学願

書を出します。しかし教授会が女子の入学を躊躇し認めません。セチは総長に直談判します。その熱意でようやく、北海道帝国大学女性初の入学を認められました。しかし、正規学部生ではなく、科目履修生としての扱いでした。

大学生になったセチは次のように語ったそうです。「講義に対して異常な感動を覚え、学問とはこのように三次元の厚みを持ち、しかも生き生きと躍動して止むことのない姿であることを感じた。」

こうして、高等女学校の教師をしながら大学で学ぶ生活を続け、3年間で修了。

その後、1922年（大正11年）理化学研究所の研究生となります。そこで、「吸収スペクトルと化学構造の関連」という研究を行い、次々に解明していくのです。1931年（昭和6年）には日本で3人目の女性理学博士となり、さらにそれまでの研究成果が認められ1953年（昭和28年）に女性初の理化学研究所主任研究員になったのです。

本日この話を取り上げたのは、かつては女性が大学で学ぶことができなかった時代があったこと、加藤セチの学問に対する姿勢、現代がいかに自由に進路選択できるようになったかということを知ってもらいたかったからです。加藤セチのこれまでの経歴を考えると相当苦勞したものと思われまゝ。まさに自分自身で人生を切り開いてきた人物と言えるでしょう。同じ山形県出身者が日本の研究者の先駆けとして活躍したことも誇りと言えます。そして忘れてならないのは継母の支えです。皆さん自身も周囲の支えを大事にし、専門的な知識・技能を身につけ、人生を切り開いていってください。

ここでもう一つのお話として、昨年11月に亡くなられた、詩人 谷川俊太郎さんの作品を一つ紹介します。谷川俊太郎さんと言えば、小学校の国語の教科書に載っていた「スイミー」の日本語訳を書いた人としても有名です。本日は「ありがとう」という詩をお届けします。

ありがとう : 谷川俊太郎

空 ありがとう

今日も私の上に来て
曇っていても分かるよ
宇宙へと青くひろがっているのが

花 ありがとう

今日も咲いていてくれて
明日は散ってしまうかもしれない
でも匂いも色ももう私の一部

お母さん ありがとう

私を生んでくれて
口に出すのは照れくさいから
一度っきりしか言わないけれど

でも誰だろう 何だろう
私に私をくれたのは？

限りない世界に向かって私は呟く(つぶやく)

私 ありがとう

最後に「私、ありがとう」というこの言葉、谷川さんはどんな意味を込めたのでしょうか。皆さんなりに少し考えてみてください。(間) もちろん、一人ひとりの捉え方や感じ方は違うでしょう。ここでは、私なりに感じたことをお話しします。

これまで生きてきた中で感謝すべき人は、家族、先生方、友人などなど。それらの人々に支えられて頑張ってくることができた。でも、よくよく考えるとどんな場面でも最終的に頑張ってきたのは、結局のところ自分自身の存在・・・だからこそ、私ありがとう。と思えるのではないのでしょうか。

保護者の皆様、お子様のご卒業誠にありがとうございます。18年間の子育ての中には数多くの苦労があったこととお察しいたします。その甲斐あって、このように立派に成長されたお子様の姿を見るにつけ、喜びもひとしおのことでしょう。3年間本校でお預かりし、教職員力を合わせて教育に力を尽くしてきたつもりではありますが、行き届かない部分も多々あったかと存じます。これまでご支援を賜りましたことに改めて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

最後になりますが、3年間を長井高校で過ごされた卒業生の皆さん、周囲の方々に対する感謝の想いと共に、「私ありがとう」を大切にし、最高の人生を作り上げていってください。

「万物我に備わる」

卒業生の皆さんの幸多からんことを願い、校長式辞といたします。

令和7年3月2日

山形県立長井高等学校長 上浦 勤